

近代日本における西洋医学の偉大な貢献者 英医 ウィリアム・ウィリス

サー・ヒュー・コートッツィ

元駐日英大使

A Great Contributor to Western Medicine in Modern Japan — A British Medical Doctor, William Willis —

Sir Hugh CORTAZZI

Former Ambassador British Embassy Japan

ウィリアム・ウィリスが1894年、すなわち明治27年2月14日に亡くなって、今年でちょうど100年になります。かれは幕末維新の歴史の転換期にあたり、数多くの戊辰戦争の傷病兵や市井の患者の治療に従事し、鹿児島における西洋医学の発展に多大な貢献をしたのであります。したがって、私たちがウィリスを記念して当地鹿児島に集うことは、当を得たことと思われまます。

私は本日の講演の機会をお与えくださった鹿児島の友人の方々に、まず御礼申し上げます。とりわけこの講演会を企画された鹿児島大学医学部、ならびに鹿児島日英協会にたいし、深甚な感謝の念を表明したいと思います。ウィリス業績を述べるにあたって、かれの生涯の研究に先鞭をつけられた方々、とくに鮫島近二博士、佐藤八郎博士、そして尾辻省悟博士のお名前を落とすことはできません。ウィリスの功績を顕彰するために尽力された佐藤博士が、昨年他界されたことは、まことに残念のきわみであります。私たちはまた、萩原延寿先生にも感謝せねばなりません。先生はウィリスが本国に書き送ったおびただしい量の手紙を発見され、それによって、日本におけるウィリスの内面生活や、かれの仕事ぶりなどが明らかになったからであります。

ご列席の皆様方は、私が1985年に著したDr. Willis in Japan; British Medical Pioneerという本をご承知のことと存じます。それは激変する明治維新の潮流を背景として、ウィリスの生活を、かれの書簡や上司への報告文を使ってまとめたものであります。そして、中須賀哲朗先生の翻訳によって、『ある英人医師の幕末維新』という題名のもとに、昭和60年に中央公論社より出版されました。したがって、私がおの書いた内容を、あまり繰り返すことは避けたいと思います。しかし、その後ウィリスに関する新しい資料を手に入れることができなかつたために、ひとつの例外を除けば、私の本に収録した事実にもとづいて、本日のお話をすすめなければなりません。

最初に、ウィリスの経歴のあらましを追ってみることにしましょう。

かれは1837年、北アイルランドのファーマーナ州で生まれました。ちょうど日本では、天保8年の有名なモリソン号事件が起こった年であります。浦賀を追われたアメリカの商船モリソン号が、ふたたび開港を求めて鹿児島湾に入港し、薩摩藩の砲台がこれを撃退するという事件があったのです。そのころ、アイルランドは、日本の天保の大飢饉と時を同じくして、未曾有の大飢饉に襲われていました。ウィリスの少年時代はけっして幸福なものではありません。かれの家は非常に貧しく、父親は狂暴な性格で、ときどき幼いウィリスをむごたらしく折檻したようです。18歳の時、ウィリスは開業医の兄の援助によって、スコットランドのグラスゴー大学医学部予科に入学し、ついで医学の名門であるエジンバラ大学にすすみ、そこで医学士の称号を得ました。卒業論文は「潰瘍化論」というものです。それから、ロンドンでもっとも大きな医師養成病院の、ミドルセックス病院医局生となったのです。1861年、すなわち日本が西洋5カ国と通商条約を締結して3年後、かれは国家公務員任用委員会の試験を受けて、江戸の英国公使館の補助官兼医官に任命されました。かれがはるかな極東の日本行きを決心した動機は、青年らしい異国へのあこがれや冒険心とともに、年収500ポンドの高給に心が動いたからにちがいません。そして、翌年6月のはじめに、長崎をへて横浜に到着します。かれが25歳の時でした。

ウィリスは来日して3週間後に、いわゆる第2次東禅寺事件に遭遇します。品川の英国仮公使館東禅寺が、守備にあたった松本藩士のひとりによって、真夜中に襲撃されたのです。英国海兵隊の伍長が殺害され、代理公使ニール中佐の寝室の番兵が致命傷をおいました。

ニール中佐はふたたび横浜に退去せざるをえなかったため、それから戊辰戦争が起こるまでの5年間、ウィリスの活動は主として横浜でおこなわれます。かれは公使館の書記のような仕事にたずさわるばかりでなく、横浜外国人居留地の患者たちの面倒もみなければなりません。横浜に退去してから二カ月ほどたって、有名な生麦事件が発生しました。

薩摩藩兵1,000人あまりを従えた島津久光の行列が神奈川の生麦村にさしかかった時、馬の遠乗りを楽しんでいた英国商人ら4人が、その行列を犯したという理由で斬りかかられたのです。上海からきた貿易商人リチャードソンが殺害され、横浜在住の商人ふたりが重傷を負いました。

生麦事件によって急速に歴史の流れがはやります。それは翌年8月の薩英戦争に発展し、ウィリスは英国艦隊の1隻に搭乗して、すさまじい砲撃戦を目撃するのです。しかし、この薩英戦争後、英国と薩摩の関係はにわかに関密の度を加えました。

1866年、すなわち慶応2年、英国公使パークス夫妻は、東洋艦隊司令長官のキング提督とともに、鹿児島を親善訪問し、藩主島津忠義と会見することになります。ウィリスがはじめて鹿児島を踏んだのは、この時でした。かれは公使の随員としてその宴席にも列席したのです。しかし、医師として生麦事件の被害者を治療した時の悲惨な印象が忘れられなかったのか、島津久光はリチャードソンの殺害を命令した悪党で、かれほどいやな表情の顔つきを見たことがない、と言っています。そして、魚だの、海草だの、きのこだの、なまこだの、つぎからつぎへと出される40皿もの日本料理に、うんざりしたのです。それでも、ウィリスは鹿児島がもっとも風光明媚な町であり、住民の生活は豊かで、むさくるしい貧困の影もない、と本国の兄に書き送っています。

それから2年後の1868年、すなわち慶応4年が改元されて明治元年となった年は、日本にとっても、またウィリスにとっても、きわめて重大な年でした。西洋諸国の外交代表団は、その年の1月1日から始まる兵庫、つまり今日の神戸の開港や大阪の開市に備えて前年末から大阪に来ていました。そして盛大に開港式をひらいたものの、1月27日に鳥羽・伏見の戦が勃発したのです。壮麗な大阪城は焼失し、大勢の将兵が銃弾にたおれました。パークスらの一行が神戸の外国人居留地に避難した直後、備前岡山藩兵400人が、外国人に発砲するという、いわゆる神戸事件が発生しています。新政府にとっては外交上の危機でしたが、パークスの助言によって救われます。この時、薩摩藩の首脳は、五代友厚と寺島篤蔵を使者として、西洋外科医の派遣をパークスに依頼してきたのです。漢方を主とする薩摩の軍医は、適切な外科手術の経験がなかったので、多量の出血や化膿のために、すでに62人の負傷兵が死に絶え、なお百人あまりが京都相国寺の養源院に収容されていました。こうしてウィリスと公使館の日本語書記官アーネスト・サトウは、尊王攘夷の本山である京都に、最初に足を踏み入れた外国人となったのです。相国寺に着いた時、薩摩藩主島津忠義が、参謀の西郷隆盛をともなって、歓迎の挨拶にみえました。ウィリスが西郷の面識を得たのはこの時です。2週間の滞在中、かれは12人の患者にたいして、手の指の除去から大腿骨の切断まで、さまざまな手術をおこなっています。その他の患者にたいしては、銃弾の摘出、腐骨の除去、膿瘍切開などを、クロロホルム麻酔法によって苦痛をとまわずにおこなったので、大変喜ばれました。かれの治療を受けた患者のなかに、西郷隆盛の弟で、頸部に重傷を負った西郷従道がいたといわれます。ウィリスが薩摩藩の医師石神良策や上村泉三らを手術介助につけ、かれらに副木や他の治療器具の使用法を指導したことは申すまでもありません。ウィリスと薩摩の医師との関係は、ここで始まり、北陸の会津戦争をへて、やがて鹿児島で実を結ぶこととなります。石神良策は非常に英語が流暢だったそうです。

この内乱の過程で、フランス公使ロッシュは、一貫して幕府支援の政策をとりました。一方、英国公使パークスが、慎重に局外中立の方針に他の外交代表らをまとめながら、その結果として薩長側に有利に働いたことは、皆様ご承知の通りであります。その年の3月23日、明治天皇の謁見を受けるために、パークスをはじめ英国公使館員の一行が参内の途中、攘夷論者の凶漢二名に不意を突かれ、一行を先導する公使館付騎馬護衛隊のうちの12人が重軽傷を負いました。その時、パークスは発足もない新政府に同情して、あえて賠償を求めなかったのです。犯人の大和の僧侶三枝蕪の着物ふところに、神聖な京都の町が外国人医師によって穢されたという主旨の紙片が入っていました。かれらの目的はウィリスの殺害にあったようです。

実は、この1868年のはじめから、ウィリスは江戸・神奈川地区の副領事に任命されていました。翌年1月1日から、江戸が外国人にひらかれるのに備えたものです。しかし、天皇の謁見を終えて横浜に帰ったものの、やがて上野の彰義隊の戦争がはじまります。ウィリスは江戸に出張して傷病兵の状況を視察し、特に重傷の者をいわゆる横浜軍陣病院に送りました。ウィリスの医療活動の7月21日付報告書によれば、横浜軍陣病院の収容患者176名のうち、薩摩藩兵がその大半の120名を占めています。桐野利秋や、のちの野津道貫元帥なども患者でした。領事館の仕事に支障のないかぎり、ウィリスは早朝の5時ごろから治療にあたっていたのです。

やがて、新政府軍と北越同盟軍との戦闘は、北陸方面で熾烈をきわめるようになりました。西郷隆盛の弟の吉二郎が、

長岡城の攻撃で敵の銃弾を受け、柏崎の野戦病院で死んだのが新暦の9月29日です。大総督府は西洋外科医の必要性を痛感し、ウィリスはその要請に応じて、冬の迫る北陸路に従軍します。10月5日に江戸を出発し、高田・柏崎・新潟・新発田・会津若松などの、土地の寺院におかれた野戦病院を巡回しました。これらの野戦病院は、ほとんど薩摩藩の施設でした。そして、薩摩の石神良策、上村泉三、高木兼寛らの軍医が20名ほど治療に悪戦苦闘していたのです。ウィリスが新発田からパークス公使にあてた報告書に「当地の野戦病院で働くすべての医者は、主として漢方医学を専門とし、それゆえヨーロッパの革新的治療法と対立すると考えられたが、私と彼らとのあいだに完全な相互理解が成立したことは、嬉しいかぎりである」と書いています。石神らとは、京都以来の再会だったのです。約3カ月のあいだ、ウィリスは彼らと協力して治療にあたり、貧しい食卓をかこみ、そしてわずかな炭火をかこんで疲れた体をやすめました。ここでも、ウィリスがクロロホルム麻酔法を用いた切開手術や、副木の当てかた、包帯の使用などを教えたことは言うまでもありません。それが鹿児島医学校の開設にあたって、野戦病院の医師らの多くがかれの弟子となり、かれにたいして援助を惜しまなかった機縁となったのです。

この3カ月の従軍で、ウィリスは600名の負傷者をみずから治療し、また約1,000名の他の患者に手当の処方を受けました。ウィリスのヒューマンイズムの精神を理解するうえでとくに強調せねばならぬことは、かれが現地駐在の新政府軍の首脳を説得して、敵軍の捕虜の処刑を止めさせたことです。上野の戦争で、捕虜が即座に打首になったことに、ウィリスはたいそう心を痛めたものでした。北陸の戦争でも、会津側の捕虜がひとりも見えないことに、ウィリスは深く憂慮していたのです。もともと日本人は敵の捕虜となることを最大の恥として、一旦捕えられると、はやく処刑してもらうために相手を口汚くののしったようです。

ウィリスはまた新政府軍首脳の許可を得て、みずからすすんで落城直後の会津若松に入りました。そして、敗残の負傷兵700名をも治療し、また、飢えと寒さに苦しむ大勢の難民を救済するために、自分の所持金をすべて投げだしたりしました。この時、薩摩の上村泉三ともうひとりが同行して、苦楽をともにしています。ウィリスの3カ月にわたる北陸戦争の従軍記は、明治維新史の研究資料として大変に貴重なものであります。

その年の暮れも押し迫った12月28日、ウィリスは北陸から江戸に帰りました。江戸はその4日後の、1869年1月1日から外国人にひらかれ、ウィリスは副領事として多忙をきわめます。しかし、貿易事務をおこなったり、居留民の訴訟を聞いて民事・刑事の裁判をおこなったりすることは、本来ウィリスの性格に向いていません。かれは折りにふれて東京の下谷の病院に加勢に出かけました。

この東京下谷の病院は、幕末の大名藤堂高猷の屋敷に横浜軍陣病院を移したものです。やがて、それは新政府が復活した幕府の医学所と合併して、東京医学校兼大病院となるのですが、これが現在の東京大学医学部の前身であります。1869年3月1日、ウィリスは薩摩藩首脳部の推薦によって、この医学校兼大病院の院長に就任します。もちろん、日本政府の要請を英国外務大臣が承認した結果によります。形式上、公使館を1年間休職した扱いになりましたが、ウィリスは本格的に西洋医学の普及を開始します。ひきつづいて戊辰戦争の傷病兵や市井の患者の治療にあたりるとともに、約200名の日本人医師にたいして、生理学や病理学の講義をおこないました。

その講義録が、『日講記聞』として残っているそうです。かれの医学校教師としての最大の貢献は、英国流の臨床医学をとりいれ、実地教育を重視した点であったといわれます。

しかし、ウィリスが医学校兼大病院院長に就任した2日後、医学取調御用掛に、長崎で学んだ蘭方医の相良知安、岩佐純という者が任命されました。当然のことながら、かれらはオランダ医学の原典であるドイツ医学の導入を計画したのです。また、周囲を蘭方医や漢方医にかこまれては、ウィリスも円満にことをはこぶことができなかつたようです。しかし、すでに鹿児島への招聘のうごきがあったので、ウィリスはこの招聘に応じて、自発的に東京医学校兼大病院を退職したのであります。従来の定説では、ウィリスの処遇に困った相良知安が、西郷隆盛に相談し、西郷の斡旋によって鹿児島行きがきまったことになっています。

1870年1月8日、すなわち明治2年12月7日、ウィリスは薩摩の医師石神良策に案内されて鹿児島入りをしました。そして、薩摩藩が明治元年に設立した西洋医院が、ウィリスの来着とともに浄光明寺跡に移され、鹿児島医学校となって活動を開始します。この医学校と附属の病院は、『鹿児島県史』をみると、発当初から相当に職制が整備されていたようであります。富国強兵策として、薩摩藩は早くから教育制度を充実させていました。それに、ウィリスもまた、たぶんに東京医学校兼大病院にたいして、強烈な対抗意識を持っていたようです。こうして、日本で最初の本格的な近代医学教育が、この鹿児島において扶植されることとなります。

しかし、鹿児島にきた当時、ウィリスは底知れぬ孤独感にさいなまれていました。東京の大病院を主宰し、日本における西洋医学の父たらしとする夢がやぶれ、さらに公使館員の地位も捨ててはるかに都落ちしてきたのです。鹿児島に

来て半年後に、かれはパークス公使あてに近況報告の手紙を書き、このように述べています。「私の生活は、文明生活の快適な環境になれている人々や、とりわけ自分自身の平和な生活を享受している人々にとって、なんら魅力的な特徴があるわけではありません。ヨーロッパの言語を話す人々から、私は数百マイルもはなれてひとりで暮らし、そしてつい最近まで、真の日本人の第一の義務は、外国人を皆殺しにすることだと教えこまれてきた連中と、私は毎日交わらねばならないのです。」

皆様がよく知っておられるとおり、薩摩は、長州とともに、尊王攘夷運動の牙城でした。それが260年の鎖国政策を堅持した徳川幕府の崩壊によって、日本が急速に西洋化の過程をあゆみだしたのは、大きな時代の流れであったのです。しかし、その時代の波のうねりが九州の末端にまで押し寄せるには、なお時間が必要でした。

ウィリスが浄光明寺跡で医学教育をはじめた2カ月後、一旦廃止されていた漢方の医学院が、藩主の侍医たちによって復活されています。いまや城内は漢方一色になったと、ウィリスを嘆かせました。かれは漢方医たちの敵愾心にみちた抵抗に遭遇したようであります。

今日、私たちは、薬草による漢方の治療法が、ある症状には実際に効果があることを知っています。そして、西洋医学と、漢方との、それぞれの長所を結合させる努力がはらわれています。しかし、その当時の漢方医は、ヨーロッパの医者のように解剖学や病理学のような科学的教育を受けていません。体内の銃弾の摘出とか膿瘍切開などの、麻酔剤を用いた外科手術の経験は、もちろんありませんでした。さまざまな軟膏を塗ったまま、自然の治癒力にまかせるといった治療法が一般的であったのです。さらに、ウィリスは京都相国寺での治療活動の報告書で、「病気療養中の患者の体を湯水できよめることを忌避するのは、あきらかに漢方の一方法である。あまりにこの考え方が蔓延しているために、傷病兵たちの治療の一部として、かれらの身体を清潔にさせることがきわめて困難であった」と言っております。しかも、その当時の鹿児島の人々は、強い薩摩なまりの方言を使っていたので、日常会話にはじゅうぶんな日本語の知識があったウィリスも、かれらと満足に意志の疎通をはかることができません。やたらにアルコール度の強い焼酎をすすめられる宴会は、かれの苦痛の種であったようです。ウィリスが鹿児島に赴任して半年ほどのちに、新政府に雇われた英国人の灯台技師リチャード・ヘンリー・ブラントンが、灯台建設の実地調査のために鹿児島を訪れました。私はブラントンの未発表の手記を編纂して、3年まえの1991年に、Building Japan 1868~1876という題名で、ジャパン・ライブラリーから出版しましたが、かれの手記によると、「ウィリス医師は当地でずいぶん尊敬されていた。しかし、かれは非常に孤独であった。かれはふたたび同国人の話す声を聞いてまったく歓喜し、われわれの船が鹿児島に碇泊中、ほとんど船上で過ごしたのである。かれの話によれば、土地の人々は危害を加えるようなことはなく、かれらなりに親切である。しかし、非常に下劣な色情におぼれ、その結果、もっとも忌むべき病気にかかっている、とも言った」と書いてあります。孤独をなくさめるために、時には日本語の勉強に没頭したり、また時には、かれの書齋においてある大英百科辞典28巻を、かたっぱしから読んでいたようです。

しかし、そのウィリスの孤独感も、やがて解消されます。鹿児島に赴任した翌年、ウィリスは江夏八重と結婚したのです。八重は島津育彬の御側役江夏十郎の三女でした。たまたま父親と前後してウィリスの診察を受けたのが機縁となったのですが、日本の習慣にしたがって、上村剛介夫妻と上村泉三が、その媒酌をつとめました。時に、ウィリスは34歳、八重は数え年21歳でした。そして3年後、加治屋町の自宅で男子アルバートが生まれます。八重は外国人と結婚したことで世間から白い眼でみられました。それでもまったく意に介さず、よく二人一緒に馬を乗りまわしていたようです。

さまざまな困難を伴いながらも、ウィリスの鹿児島医学校と附属病院は、順調に発展を遂げました。ウィリスの名声を慕って県外各地からの入学者も多く、学生数は1875年現在で150人ほどに達しました。はじめのころは、医学教育は本科と別科にわかれていたようです。本科では英語の授業のほかに、薬物学・生理学・解剖学・外科学・産科学など、医学全般にわたって原書を用いて教えました。高木兼寛や三田村肇は、本科の第一期生でした。高木はのちにロンドンに留学し、海軍軍医総監をつとめ、東京慈恵会医科大学を創立してその学長となります。日本で最初の医学博士でした。三田村は和歌山の出身ですが、東京医学校兼大学病院の医局員としてウィリスに師事し、ウィリスに従って鹿児島に来たのです。石神良策や高木兼寛が海軍に出仕したのち、よくウィリスをたすけ、ウィリスの講義を翻訳して『黴毒新論』という本を著しました。西南戦争では、西郷軍の軍医長として出陣します。1901年に、かれもまた海軍軍医総監となったのです。ちなみに、小説家としても有名な森鷗外が陸軍の軍医総監になったのは、高木兼寛より22年あとのことです。高木や三田村以外に鹿児島医学校から近代医学の旗手たちが、多数輩出されていったのです。

修業年限が2年の別科は、郷村の医者の子弟に実地教育をほどこし、ウィリスの優秀な弟子たちの、石神良策や高木兼寛、三田村肇らが教えたようです。

ウィリスは1日おきに講義をしました。そして、講義の翌日は学生らを伴って、午前中は入院患者の治療と外来患者

の診察，そして，午後は4時半から7時まで，在宅患者の往診にまわりました。佐藤八郎先生のご指摘によると，ウィリスの医学教育は，講義と実習とをあわせて指導するところに重点をおいたといわれます。この臨床教育を徹底的におこなったところが，従来の医学書を読むことだけに精力をついやした蘭学とは異なる点であります。藩の知政所に死体発掘の申請を出し，祇園の洲で男女の死体解剖の実習をおこなったりしたことは，ウィリスの教育の進歩的な特徴を示すものでしょう。

今日の医学は，非常に高度な専門に細分化されています。しかし，ウィリスは医学の各分野にわたって講義と治療をおこなわなければなりません。眼科医であった鮫島近二先生によれば，ウィリスは日本で最初の緑内障の虹彩切除の手術をおこなったそうです。そういえば，小川町の赤煉瓦造りの洋館に移された病院は，当時の人々が赤倉病院と呼んだほど倉庫のような建物だったので，非常に採光が悪く，眼の手術に支障をきたすと，藩当局に改善を要求しています。

1871年，ウィリスは藩の知政所に提言して，はやくも妊産婦の検診を開始しました。武士の妻が外国人の検診を受けて離婚されたという，笑えぬ話もありますが，このような予防医学を重視したのは，当時としては非常に進んだ見識と言えましょう。1875年に一時帰国するにあたって，県令大山綱良にあてた書簡にも，ウィリスは「実は病気は治療するよりも予防することがさらに重要である」と述べています。

この観点に立って，ウィリスはさまざまな公衆衛生や環境問題の改善にとりくみました。たとえば，急激な西洋文明の導入によって，日本人の衣食住が変化し，牛丼がはやりました。しかし，農民にとって生きた牛は大切な労働力です。それで，当時の人々は死臭のする牛肉でも好んで食べたそうですが，ウィリスは知政所に勧告して，死んだ牛の肉の食用を禁止させます。そして，生きた牛の食肉処理をやってみせたので，そのために鹿児島の人々から，西洋の医者は食肉処理業者かと誤解されたそうです。

また，薩摩芋ばかりに頼りがちな一般庶民の食生活を心配して酪農を奨励したり，鹿児島町の町の上水道の普及や排水溝の整備を促進したり，貧者のための慈善病院，あるいは梅毒患者やハンセン氏病患者の隔離病院の建設を提言したり，ウィリスの関心は常に社会の底辺にそそがれていました。今日では想像もつかぬほど梅毒やハンセン氏病がはびこっていたのです。

このようなウィリスの誠実な医学的貢献も，1877年の西南戦争で終わりました。その後，ウィリスは薩摩の英雄西郷隆盛とあまりにも親しかったために，日本に適当な職を見つけることができなかったのです。結局，江夏八重とも離別して本国に帰りますが，それは当時の民族的偏見が支配する社会では，やむをえないことでした。それにしても，ウィリスが晩年に書いた財産処分の遺言書は，八重とのあいだに生まれたアルバートへの細やかな愛情にあふれ，読む者に悲痛な感慨をおこさずにはいません。

日本の方々にもまたウィリスを忘れず，かつて厳寒の会津若松まで同行した上村泉三らの提唱によって，1893年，すなわちウィリスが亡くなる1年前の明治26年に，立派な頌徳記念碑を建ててくださいました。これは現在，鹿児島大学医学部の，附属病院の前庭にみることができます。このように国際関係は個人の善意から発展します。

ウィリスについて，かれの人柄を表すエピソードや，当時の外国人居留地における男女関係，あるいはかれの鹿児島の人々との社交生活など，お話したいことがたくさんありました。しかし，時間の制約もあり，本日はウィリス没後百年の集いでもありますので，主としてウィリスの業績を中心にお話いたしました。最後に，そのウィリスの業績を受けつぎ，西洋の近代医学発祥の地の伝統をもつ鹿児島大学医学部が，今後ますます発展を遂げるよう祈願して，私の講演を終わらせていただきます。長時間ご清聴くださり，ありがとうございました。